

はじめに

子どもたちは教師の言葉をしっかりと聞き、教師の言葉に対して、実に素直に動こうとします。算数の授業は、教師がどのような言葉を、どんな子どもたちに向かって発するののかによって、大きく変わっていきます。

若い頃のわたしは、このことに気づいていませんでした。

4月に出会った子どもたち。算数の授業をしていると、多くの子どもたちがやる気に満ちた顔をして、何度も手を挙げて発表しようとしていました。しかし、6月頃になると、なぜか、手を挙げる子どもがだんだんと少なくなっていきました。当時のわたしは、どうしてそのようなのか、よくわかりませんでした。

ある日の自分の算数の授業をビデオに撮り、放課後、見てみました。ある場面で突如、新しい式が出てきたときです。画面の中のわたしは、「どうしてこの式になるのか、わかった人？」と、子どもたちに尋ねていました。

その言葉を受けて手を挙げている子どもは数人しかいませんでした。それはそうです。手を挙げることができるのは、わかっている子どもだけだからです。どうしてその式になるのかがわかっていない子どもは手を挙げることも、何かを言うこともできなかつたと思います。わたしの言葉は、わかっている子どもを対象にしている言葉だったのです。

当時のわたしは「どうしてそうなるのか、わかった人？」と、いつも同じような言い方ばかりしていました。その結果、わかっている子どもだけが反応し、わからなかつた子どもたちは手を挙げる機会を少しずつ奪われていったのだと思います。

あの瞬間に、他の言葉を選ぶことができているならば、その後の子どもの反応は変わっていたはずですが、いろいろな言葉が、わたしの引き出しとしてあればよかったのですが、当時はありませんでした。

例えば、「『どうしてこの式になるの？』って思う人？」「この式の意味が少しわからないなっていう人？」というような言葉の引き出しがあれば、授業は変わっていたと思います。

この場合は、わかっている子どもが言葉の対象になっているわけではなく、困っている子どもが対象になっているのです。困っている子どもたちを対象にしているのです、先ほどの授業の展開とは変わっていきます。

わたしたちは、授業のある瞬間に、いろいろな言葉を発しています。言葉の引き出しがなければ、いつも同じことを言うしかありません。

多くの言葉の引き出しがあれば、選ぶことができます。その瞬間に、多くの子どもたちのために大切にすべきことは何か、判断することができます。

教師の一つ一つの判断が、授業を左右していくのです。

本書では、具体的な授業の場面について、3つの言葉の選択肢を示しています。教師がある言葉を言ったとき、どんな子どもが反応するのか、子どもたちはどんなことを思うのか、考えながら読み進めていただければと思います。その結果、この本を手にとってくださった方の言葉の引き出しが増え、子どもたちを大切にする教師の判断力が培われていくことを願っています。

自分の算数の授業を少しでも変えたい。でも、どうすればよいのかわからずに困っている。けれど、一生懸命に、目の前にいる子どもたちが笑顔になる算数の授業を目指している。そのような方に、本書を読んでもいただければ幸いです。

2023年2月

筑波大学附属小学校 森本隆史

CONTENTS

はじめに	002
もくじ	004
本書の使い方	006

1 章 授業中の判断の4つの基準

授業は教師の判断の連続によって創られている	010
教師の言葉によって子どもたちの感じ方は変わる	012
瞬時の「判断」にかかわっていること	014
判断の基準1 ▶ どんな授業場面か	016
判断の基準2 ▶ どの対象に向けて話すか	018
判断の基準3 ▶ どの役割の言葉を使うか	022
判断の基準4 ▶ どんな目的のために言葉を選択するか	024
教師の判断の「役割」と「目的」	034
Column ▶ 「私、今日の先生の授業の進め方、きれいです。」	036

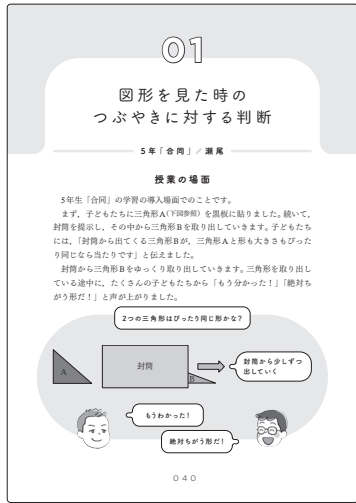
2 章 算数授業での教師の判断力

① ▶ 図形を見てつぶやいたときの判断 [5年]	040
② ▶ 2通りのグラフが出たときの判断 [3年]	046

③ ▶ 未習の用語が出たときの判断 [6年]	052
④ ▶ 子どもの発言が「まちがい」だと思ったときの判断 [2年]	058
⑤ ▶ 子どもが困っているときの判断 [5年]	064
⑥ ▶ 友達の説明が伝わらなかったときの判断 [6年]	070
⑦ ▶ 新しい考えが出たときの判断 [4年]	076
⑧ ▶ 一人の子どもから問いが出たときの判断 [6年]	082
⑨ ▶ 既習の内容でまちがったときの判断 [6年]	088
⑩ ▶ 誤答が出たときの判断 [4年]	094
⑪ ▶ 意味を理解しているか曖昧なときの判断 [6年]	100
⑫ ▶ 誤答を活かしたいときの判断 [5年]	106
⑬ ▶ 問題の文脈を捉えていないときの判断 [2年]	112
⑭ ▶ 友達の説明に違和感を覚えているときの判断 [3年]	118
⑮ ▶ 自力解決でつまずいているときの判断 [5年]	124
⑯ ▶ 誤答を取り扱うときの判断 [1年]	130
⑰ ▶ 多くの子どもが誤答に納得しているときの判断 [1年]	136
⑱ ▶ 少数派の意見を取り上げたいときの判断 [3年]	142
⑲ ▶ 気づきを促すときの判断 [4年]	148
20 ▶ 特殊な事例を意識させたいときの判断 [3年]	154
21 ▶ 集団検討に入るときの判断 [5年]	160

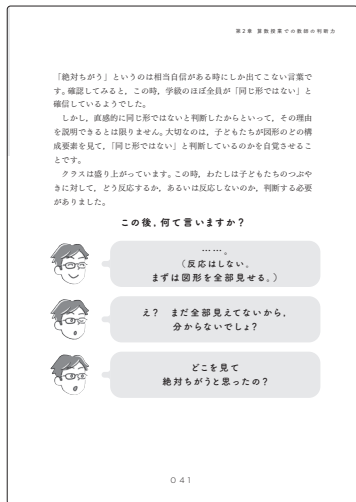
おわりに	166
執筆者一覧	168

本書の使い方



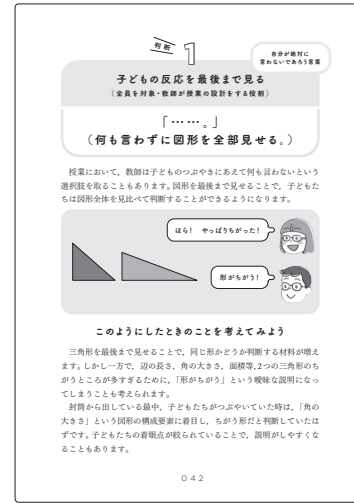
1ページ目

第2章の1ページ目と2ページ目の途中までには、どの学年のどの単元のどんな授業場面なのか説明しています。授業で出した問題や、教師が言ったこと、それに対して子どもたちがどんなことを言ったのか、どんなことに困っているのかなど、なるべく詳しく書いています。実際の授業場面をイメージしていただいて、授業者になったつもりで読んでみてください。



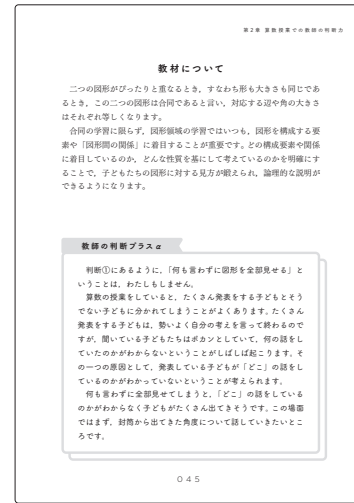
2ページ目

2ページ目の最後には、それぞれの授業場面の後、どのように言うのか、教師の言葉を3通り吹き出しに書いています。3ページ目以降を読む前に、それぞれの言葉を言った後、子どもたちはどんなことを感じるのか、どんなことを考えなくなるのか、またはならないのか、その後の授業はどのように流れていくのかなど考えてから、ページをめくってみてください。



3~5ページ目

教師の判断1から判断3について述べています。判断1は、それぞれの場面で、執筆者が「絶対に言わないであろう言葉」を書いています。判断2と3については、実際に使いたい言葉です。教師の言葉がどの対象の子どもに向けた言葉になっているのか、どんな目的があるのかについて、それぞれのページの上の部分に記載しています。



6ページ目

前半部分は、それぞれの授業の教材に関係のあることについて書いています。教材研究の参考にしていただければ幸いです。後半部分は、教師の言葉の価値や他の言葉を使うとすれば、どんな言葉を使うことができるのかなど、森本がそれぞれの実践について思ったことを書いています。

目の前の子どもたちは、それぞれの学級でちがいます。「自分のクラスの子どもだったら、どう考えるかな」などと考え、読者の先生の言葉の引き出しが増えることを目的にしています。

1

— 章 —

授業中の判断の
4つの基準

授業は教師の判断の連続で創られている

私たち教師は、授業のさまざまな場面で、学び手である子どもたちの発言内容、つぶやき、表情、しぐさ、体の動きを見取り、さらには、心の機微などを感じ取っています。そして、それぞれの子どものよさを生かすことを頭の中で思い描き、瞬時に判断し、対応しています。この判断によって、その後の授業の展開は大きく変わっていきます。そんなことを考えると、教師の細やかな判断の連続によって、授業は創られていると言えます。

当たり前のことですが、瞬時の対応の仕方は、個々の教師によって異なります。どのように対応するのかは、それぞれの一瞬の判断に委ねられるからです。採用1年目の先生と、20年目のベテランの先生では、見えている世界も異なるでしょうし、持っている引き出しの数もちがうはずです。また、同世代の先生同士を比べても、それぞれの教科の見方・考え方を大切にしている先生は選択する言葉も変わってきます。

教師が判断するためには、目の前にいる子どもたちをしっかりと見つけて、ひとつの授業の中で子どもたちに与えられることは何なのかについて、考える必要があります。そして、思い浮かぶ選択肢の中から最善だと思える言葉を決めていきます。しかも、その判断は、一瞬で行われています。多くの教師は、子どもたちのためによりよい授業をしたいと願っています。そのために何度も判断をしているのです。

例えば、ある子どもが発言をした場面について考えてみます。周りの子どもは一生懸命聴いていたのだけれど、発言した子どもの言ったことが「よくわからない」という場面がたまにありますよね。すごく長く話してくれたのだけれど、周りはポカンとしているような場面です。

わたしたち教師は、話を聴いている子どもたちの表情を見て、「今の話は伝わっていないな」と感じ取ります。

読者のみなさんなら、こんなとき、次にどのようにしますか。

「今、〇くんが言ったのは、～ということだよ。わかった？」などと、教師が説明をするという判断をする方もいらっしゃるのではないかと思います。教師が説明をすることで、わかっていなかった子どもたちは、その子の言ったことを理解することができるでしょう。教師はそれを見て一安心します。しかし、このようなことをくり返していると、子どもたちの表現力は育たないですし、友だちの話を聴こうとする態度も育ちません。

「今のお話、ちょっと難しかったんじゃない？」と、周りの子どもたちに尋ねるといふ選択肢もあります。このように尋ねれば、きっと、「うん。少し難しかった」とか、「よくわからなかった」と素直に表現してくれるはずなので、もう一度、発言した子どもに「もう一回説明してみる？」と言うこともできます。そうすると、先ほどとは展開が変わってきます。

つまり、教師の判断によって、言葉を選択することで、その後の授業の展開が変わっていくということです。



教師の言葉によって 子どもたちの感じ方は変わる

子どもたちは教師の言葉をとても素直に聞いています。わたしたちが発した言葉によって、子どもたちが感じることは変わってきます。これは算数の授業に限らず、すべての教科で言えることです。

子どもたちの周りを歩いていて、よい考えをノートに書いている子どもを見つけたとき、教師はその子どもを指名したくなります。そして、その子どもを指名してみます。すると、その子どもがノートに書いていた考えとはまったくちがう考えを発表するという経験がわたしにはあります。読者の方の中にもそういうことはありませんか。

このような場面で、我々がどのように言うのかによって、授業展開が変わっていきまふし、子どもたちが感じることも変わっていきまふ。



指名された子どもは自分が言いたい考えを言ったはずでふ。しかし、教師は、自分が期待していた考えを子どもが言わないときに、
「あつ、それじゃなくてノートに書いてあることを言ってくれる？」

と、言ってしまうこともあります。子どもにとってみたら、「え？ なんて？」と思うのではないでふしょうか。周りの子どももこのような教師の対応を見えています。「自分も言いたいことを言ったら、先生に『ちがう、それじゃない』って、言われるかも」と思う子どもも出てくるかもしれまふ。子どもたちの主体的な姿を引き出すという授業とは、どんどん遠くなってしまふそうです。

頭の中では、「あつ、期待したことを言わなかつたな」と思いつつも、「**どうして、そう考えたの？**」と、発言した子どもに根拠を尋ねることもできます。当然、教師がもともと想定していた授業展開とは変わってくるでふしょうが、子どもが悪いわけではありまふせん。長い目で見ると、子どもたちは主体的になることにつながっているのです。

わたしたちが授業中に判断する場面は他にもたくさんあります。

- ・子どもの発言が「まちがふ」だと思つたとき
 - ・子どもがまだ習っていない算数用語を口にしたとき
 - ・子どもが考えを伝えようとしたけど、どうしても伝わらないとき
 - ・わかっている子どもが自分の考えを勢よく言つたとき
 - ・多くの子どもが誤答のまま納得しているとき
 - ・多くの子どもに気づきを促したいとき
- など

算数の授業をしていると、教師が想定していなかつた子どもの反応が出てくるのがたくさんあります。このような場面でも、わたしたちは一瞬で判断をして、子どもたちに向けて、何かしらの言葉を発しています。その言葉によって、その授業の流れも変わっていきまふし、大きくとらえると、子どもたちの授業観も変わっていきまふ。

2

— 章 —

算数授業での
教師の判断力



01

図形を見て つぶやいたときの判断

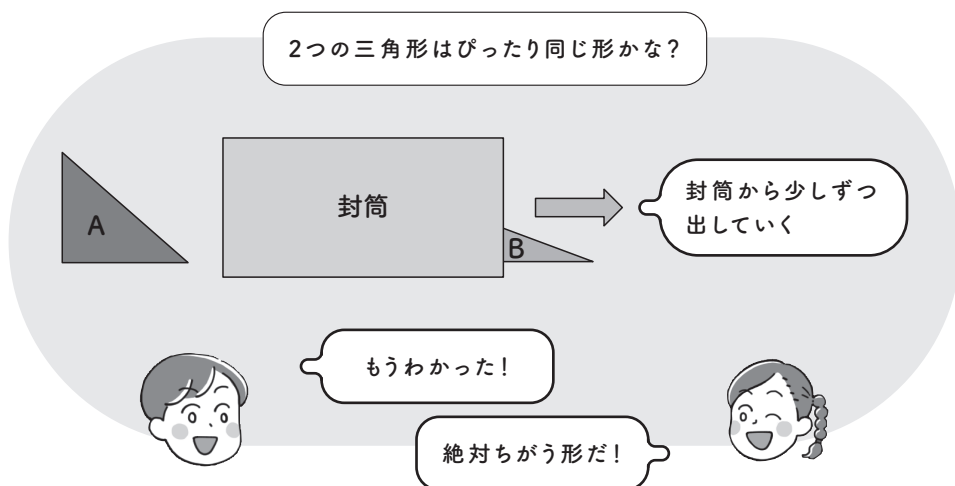
5年「合同」 / 瀬尾

授業の場面

5年生「合同」の学習の導入場面でのことです。

まず、三角形A(下図参照)を黒板に貼りました。続いて、封筒を提示し、その中から三角形Bを取り出していきます。子どもたちには、「封筒から出てくる三角形Bが、三角形Aと形も大きさもぴったり同じなら当たりです」と伝えました。

封筒から三角形Bをゆっくり取り出していきます。三角形を取り出している途中に、たくさんの子どもたちから「もうわかった!」「絶対ちがう形だ!」と声が上がりました。



「絶対ちがう」というのは相当自信があるときにしか出てこない言葉です。確認してみると、この時、学級のほぼ全員が「同じ形ではない」と確信しているようでした。

しかし、直感的に同じ形ではないと判断したからといって、その理由を説明できるとは限りません。大切なのは、子どもたちが図形のどの構成要素を見て、「同じ形ではない」と判断しているのかを自覚させることです。

クラスは盛り上がっています。この時、わたしは子どもたちのつぶやきに対して、どう反応するか、あるいは反応しないのか、判断する必要がありました。

この後、何て言いますか?



……。
(反応はしない。
まずは図形を全部見せる。)



え?
まだ全部見えてないから、
わからないでしょ?



どこを見て
絶対ちがうと思ったの?

判断 1

自分が絶対に
言わないであろう言葉

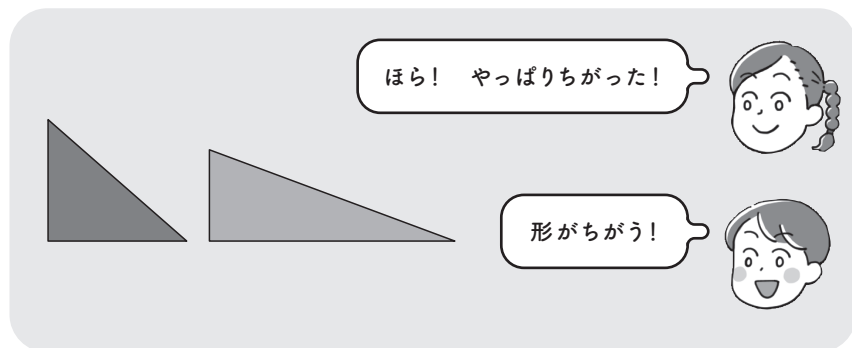
子どもの状況を見取る

(全員を対象・教師が授業の設計をする役割)

「……。」

(何も言わずに図形を全部見せる。)

授業において、教師は子どものつぶやきにあえて何も言わないという選択肢を取ることもあります。図形を最後まで見せることで、子どもたちは図形全体を見比べて判断することができるようになります。



このようにしたときのことを考えてみよう

三角形を最後まで見せることで、同じ形かどうか判断する材料が増えます。しかし一方で、辺の長さ、角の大きさ、面積等、2つの三角形のちがうところが多すぎるために、「形がちがう」という曖昧な説明になってしまうことも考えられます。

封筒から出している最中、子どもたちがつぶやいていた時は、「角の大きさ」という図形の構成要素に着目し、ちがう形だと判断していたはずです。子どもたちの着眼点が絞られていることで、説明がしやすくなることもあります。

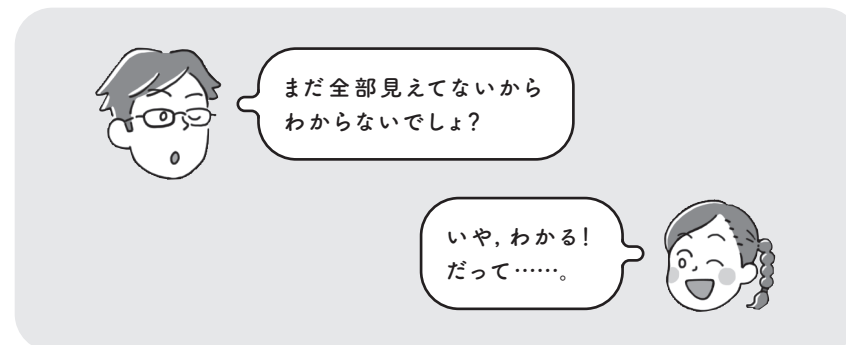
判断 2

心のハードルを下げる

(全員を対象・子どもに寄り添う役割)

え? まだ全部見えてないから、
わからないでしょ?

「もうわかった!」という子どもに応じた言葉になりますが、対象は学級全員です。この言葉には、「まだ全部見えてないんだからわからなくて当然だ」というニュアンスが含まれており、まだ判断できていない子どもに寄り添った言い方になっています。



このように言ったときのことを考えてみよう

まだ判断できていない子どもは、「そうさそうさ」と頷き、判断できている子どもは、「いや、わかる!」と逆に説明意欲を増すような反応をすることが予想できます。答えられなくて当然、という回答のハードルを下げる言葉ですから、その後説明しやすくなることも考えられます。

また、教師が「全部見てないのに」と言うことで、逆に「ここさえ見ればわかる」と、子どもが自分の着眼点に気付く効果も期待できます。